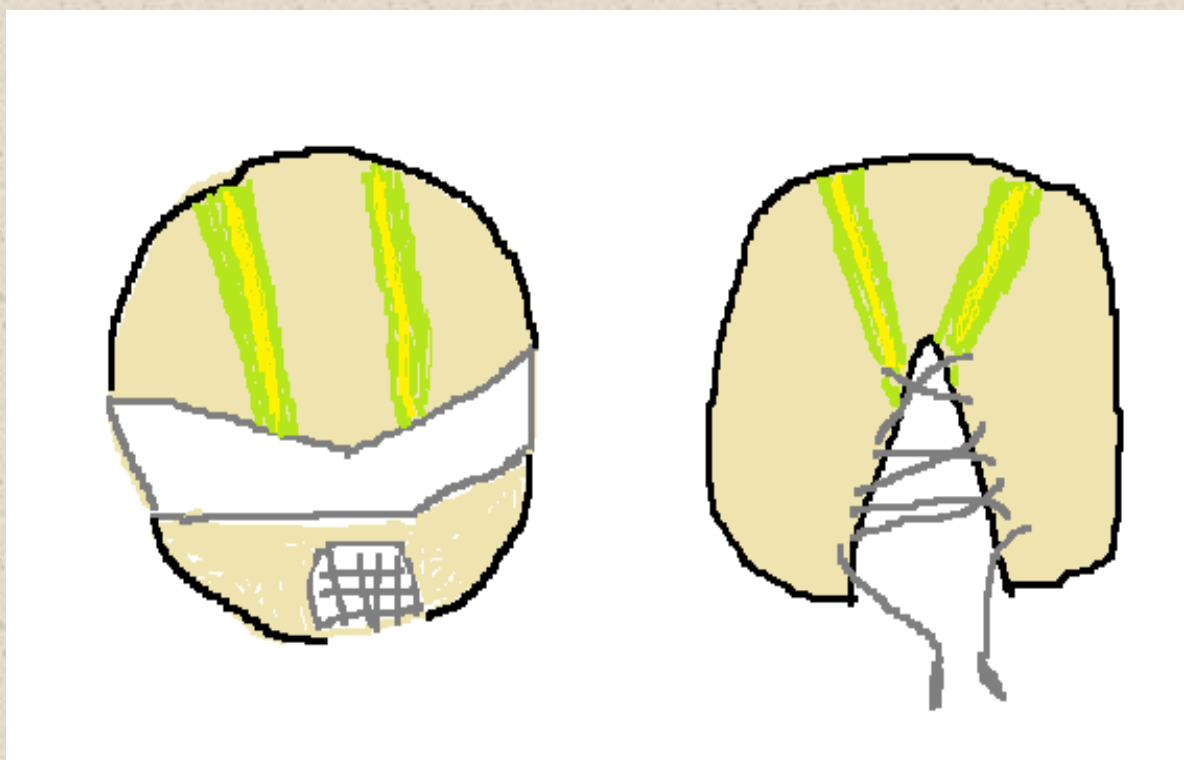


Mask worn by Negi-white

ネギホワイト着用マスク



Front

正面

Back

後ろ



スーツアクターを知っているだろうか。スーツアクターとは、「スーツを着た俳優」。

特撮番組に登場するヒーローたちの、変身後の姿でアクションシーンに挑む。

それがスーツアクターなのだ。

俺は今、ネギ戦隊というヒーローに扮している。

特撮番組の出演はないが、イベントで奮闘する毎日だ。

「ネギホワイト、がんばれ！」

子供たちが叫ぶ。

尾崎は予定通り〈やられて〉いるようだ。大きく深呼吸をして、出番に備える。

「ネギグリーン、早く来て！」

両のこぶしを固く握ると、全身に力がみなぎった。

もう一度深呼吸をして、観客席へ目をやると、

疑うことを知らない瞳は、しっかりと尾崎、いや、ネギホワイトを見据えている。

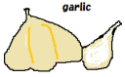
「よし——」

ステージ上に一步を踏み出す。尾崎が振り返ってうなずいた。

俺もうなずき、敵にとび蹴りをくらわす。

歓声がわき起こる。敵は受け身を取って倒れ、立ち上がって戦闘姿勢をとった。





もう一人の敵は、尾崎に倒され退場した。残ったこいつが親玉だ。

俺は小声で、尾崎に段取りを伝えた。

しばらく向かい合ったまま、ステージ上でゆっくりと回る。

タイミングが合ったところで技を繰り出し、フィニッシュへと持ち込む。

尾崎がうなずいたのを見て、俺は左に一步踏み出した。

尾崎も続く。間髪入れず、子どもたちの声援が飛んだ。

「がんばれ！」

「負けるな！」

「「ネギグリーン！」」

ふっ、と尾崎が苦笑した。自分を嗤ったのか。俺を嗤ったのか。

確かめる間もなく、来い、と敵が言う。大きく息を吸い込み、俺は叫んだ。

「風邪大魔王、覚悟！」

二人同時にとび蹴りをくらわせると、敵は倒れ、

おのれネギ戦隊と叫びながらのたうちまわる。

やがて右手を上げ、覚えておれ、とつぶやくと、上げた手を下ろして息絶えた。



俺は奴のそばにしゃがみ、ご苦労さん、と小声で言った。

マスクの下に、笑顔が見えた気がした。

「風邪大魔王は、ネギ戦隊の力で退治できました！」

会場にアナウンスが流れる。

わあ、と歓声を上げる子どもたち。

やったやった、と喜んでいる。本当に嬉しそうだ。

「じゃあ例のやつ、いくよ」

再度のアナウンスで子どもたちは整列し、右手を高くつき上げる。

「「ありがとう、ネギ戦隊、タベルンジャー！」」

子どもたちの笑顔がまぶしい。

俺たちは並んで両手を上げ、ありがとう、と言いながら手を振った。

そこへアナウンスの当事者が現れる。売り出し中の声優だ。

「ねえみんな、おうちに帰ったら何するんだっけ？」

手洗い、うがい、と声が飛ぶ。

「そう。手を洗って、うがいだね。そのあとは？」





そのあと？ 子どもたちは不思議そうな顔をする。

大丈夫だろうか。開始前に、仕込みをしていたはずだが……。

不安になったそのとき、男の子が立ち上がった。

「ネギを食べる！」

声優はホッとしたように笑う。

「はい、正解です。みんな拍手！」

男の子を囁す声にまじり、ぱちぱちと拍手がこぼれた。

「みんな、帰りにネギをもらってね。レシピはお母さんに渡してね」

はあい、と元気に返事をして、子どもたちは出口へ向かう。

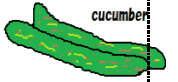
会場出口でネギとレシピを受け取り、次々に外へ出ていった。

その様子を見て、ホッと安堵のため息をつく。

このイベントは地元産品を地元で消費する、地産地消の試みだ。

地元密着のNPO、地産地消を考える会がイベントを企画、

我々がネギの効用を訴え、消費を後押しする目論見だ。



ふう、と大きく息を吐き、両手を上に伸ばす。

「お疲れさまでした」

声のしたほうを見ると、声優がにっこり笑っている。あわてて両手をおろす。

よし、ここはネギ戦隊として応えよう。

そう思ったとき、尾崎が割り込んできた。

「お疲れさまでした。このあと、予定ありますか？」

声優の笑顔が凍りつく。

おい、と後ろから肩を叩いたが、尾崎は俺の手を払い、

よかったらお茶でも、と畳みかけた。

後頭部の髪の毛が乱れている。

こいつ——マスクは控室で取れと言ったのに！





Glove worn by Negi-white(right hand)

ネギホホワイト着用グラブ（右）



「お疲れさん、良かったよ」

どうも、と俺は挨拶をした。この人はNPOの会長だ。

「まあ、客の入りは今ひとつだったけど……」

そう言って頭をかく。

俺はヒーローマスクを外し、ふう、と大きくため息をついた。

「引率された幼稚園児だけじゃ、客とは言えませんね」

尾崎が不機嫌そうに言う。

「そうなんだよね、一般のお客さんに来てもらわないと……。何かないかな」

「ネギをやめればいいでしょ、簡単ですよ」

「いや、でもさあ」

会長が抗議する。

「ここの特産はネギなんだから、仕方がないじゃないの」

尾崎はふっ、と鼻で笑う。

「ならあきらめることですな。一生幼稚園児を相手にしてりゃいい」

「いやそこを何とか……いいアイデアないかな」





「さあね」

尾崎はヒーロースーツを脱ぎ、無造作に椅子の背に置いた。

置き方が雑すぎて床に落ちそうなのに、気に留める様子もない。

不満げな態度はいつものことだが、さすがに目に余る。

頼むよ、と会長は食い下がる。ねえ村田ちゃん、と水を向けられ、あ、ええ、とうなずく。だが尾崎はかまわず文句を言いはじめた。

「だいたいネーミングが悪すぎます。

ネギ戦隊なんて、ふざけてるとしか思えない。

しかもタベルンジャーだなんて——」

蔑むように笑い、首を横に振りながら言った。

「ありえないっしょ」



その瞬間、呼吸が苦しくなった。

長いこと大丈夫だったのに。よりによって、今——。

目を閉じてやり過ごそうとした。

ダメだ。友達に怪我をさせた、あの光景がよみがえる。

あわててしゃがみ込み、大きく深呼吸をした。

その甲斐あって、少しずつ平常に戻っていく。

「大丈夫？」

目を開けると、会長がのぞき込んでいる。手には水の入ったコップ。

コップを受け取り、一気に水を飲み干した。

立ち上がると、尾崎の背中が見えた。シャワールームへ向かうのだろう。

「明日もよろしくな」

そう声をかけたが返事はない。思わずため息が出た。





「最初はいい感じだったんだけどねえ」

そうだ。入ったころはとても積極的で、休日に俺の家まで来て、新技を披露したこともある。それを言うと、会長の顔がほころんだ。

「あったねえ、うん、懐かしいな」

でもすぐに顔を曇らせ、ため息をつく。

「やっぱりあれかなあ、就職の面接で落とされたっていうのが……」

俺はうなずき、そうでしょうね、と言った。

面接でネギ戦隊のことを言ったら、笑われたあげく落とされた。

一ヶ月前、

そう告げた尾崎の顔は真っ青で、泣き出したいのを必死で我慢しているようだった。

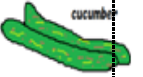
それから技の練習もしなくなり、イベントもほとんど欠席。

今日現れたのは奇跡に近い。あの様子では、明日は無理か……。

「じゃあ村田ちゃん、大変だろうけど、よろしくね」

そう言って会長は出ていった。

俺はやりきれない思いを抱え、またため息をついた。



当初五人だったネギ戦隊は、半年で俺一人となり活動休止。

去年の暮れに尾崎が入り、ホワイトとグリーン、二人体制になった。

明日、春分の日イベントは、尾崎が来なければ中止になる。

それでもすべてを受けとめ、うまくやってほしい。それが会長の願いだ。

「そう言われてもなあ……」

ホワイトとグリーンが力を合わせる事が重要なのだ。

風邪予防のためには、ネギを丸ごと食べるのが良い。

そう訴えるのが活動の目的だ。

目的を果たせないのなら、ネギ戦隊など必要なくなってしまう。

明日尾崎が来なければ、また活動休止になるかもしれない……。

気がつくやうに、また深いため息をついていた。

オヤジならこんなとき、どうするのだろう。

ふと、そんな思いが浮かんだ。





俺の父親はスーツアクターだった。

子どものころ、父親をテレビで見るたびワクワクして、見終わると友達に自慢した。

今日も父さんが敵を倒したんだ、毎回俺の父さんが倒してるんだぜ、と。

でも信じてもらえなかった。

主役は若いイケメン俳優だから、敵と戦うのも俳優本人だと友達は主張した。

オッサンにあんな動きができるわけない、というのがその根拠で、

俺が口を挟もうとすると、お前のオヤジなんか冴えないオッサンじゃないか、

絶対ありえないよ、と友達は言った。

毎回その繰り返しで、あるとき、ひどく傷つく言い方をされた。

「あ・り・え・な・い。ありえない！」

俺は頭が真っ白になり、気がつくやうに友達が傷だらけで倒れていた。

翌日、友達の家へ行き、オヤジと一緒に頭を下げた。

オヤジは帰ると、何も言わず荷物をまとめ、引っ越し業者を呼んだ。



引っ越し先でも、俺はオヤジの凄さを訴えた。

殺陣やワイヤーアクションも優雅で、軸がぶれることもない。

その素晴しさを伝えようとした。

だが皆には無視された。罵声を浴びせられたり、暴力をふるわれたりもした。
なぜ分かってくれないのか。詰め寄ったはずみでまた怪我をさせてしまった。

オヤジは俺と一緒に頭を下げ、帰るなり荷造りをして引っ越し業者を呼んだ。
だが行く先々で、同じ事態に巻き込まれた。

自分はヒーローだ、息子は正しい。オヤジにはただ、そう言ってほしかった。
それなのに――。

俺が高校に入ると、オヤジはスーツアクターをやめた。

ヒーローでいてほしかった俺は父親と話をしなくなり、
わだかまりを解消できないまま、一人あとに残された。





「なあオヤジ」

俺は天井を見上げた。

「尾崎のやつ、やめちまうのかな……」

オヤジの颯爽とした姿が脳裏をよぎる。

「やめてほしくないんだよ。なあ、どうしたらいい？」

俺はうつむき、深くため息をついた。

子どものころ、オヤジは宇宙一カッコいい存在だった。

そのカッコよさを分かってほしい。それだけが望みだった。

あのときたった一人でも、オヤジをヒーローだと認めてくれていたら、俺は誰にも手を出さずに済んだ。

勝手な言い分というの**は**分かっている。

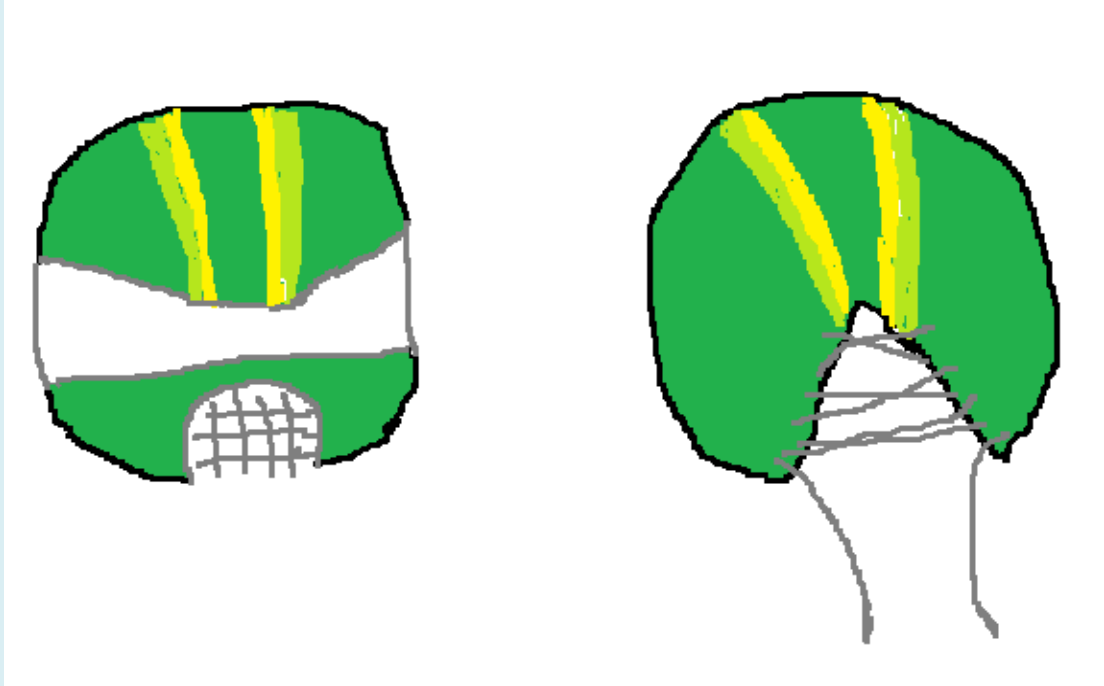
だがスーツアクターという仕事の価値を、たった一人でも認めてくれていたら……、

そうしたら俺は、そいつと無二の親友になれた。

今でも、そう思えてならないのだ。

Mask worn by Negi-green

ネググリーン着用マスク



Front

正面

Back

後ろ



翌日のイベントは無事終了した。

客の入りも上々で、会長もほっと胸をなで下ろしたようだ。

尾崎は心を入れ替えたともえ、集合時間よりもだいぶ前に現れた。

入念なリハーサルで臨んだイベントは大成功に終わり、
子どもたちに向かって手を振る尾崎は、本当に嬉しそうだった。

「村田さん、水くさいじゃないですか」

着替えたあと、尾崎が話しかけてきた。

「何で話してくれなかったんですか」

「何のことだ」

「会長も知ってたんでしょ、人が悪いなあ」

俺と会長は顔を見合わせた。

何を言っているのか、さっぱり見当がつかない。

「だからあ、村田さんのお父さんのことですよ」





「オヤジの？」

思わず声を上げると、尾崎は嬉しそうにうなずいた。

「俺、めちゃくちゃ尊敬してて、村田さんのお父さんのこと」

満面の笑みで尾崎は続ける。

「あの人の息子と仕事してるなんて、ホント夢みたいっすよ」

ホント夢みたいっすよ——。尾崎の言葉がぐるぐると回る。



ハッとして、目が覚めた。

夢か……。





Glove worn by Negi-green (left hand)

ネギグリーン着用グラブ (左)

「尾崎ちゃんが、村田ちゃんのお父さんを知ってたって？」

「いやだから、夢ですよ、夢」

何気なく夢の話をしたら、会長は思いのほか喜び、嬉しそうな顔をした。

「本当に知ってたらいいいねえ。」

村田ちゃんのお父さん、めちゃくちゃカッコよかったよ」

「そりゃまあ、そうですけど。でも——」

「そんなこと、あるわけない？」

俺はうなずいた。

尾崎がオヤジのことを知っているなど、考えられなかった。

だが.....夢の中の尾崎におかしなところはなく、いつも通りだった。

細部が妙にリアルで、夢とは思えない。

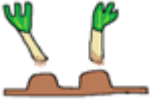
だからといって尾崎がオヤジを知っているとは、やはり考えられないのだが.....。

「来ないねえ、尾崎ちゃん」

会長は控室の時計を見て、ため息をついた。

そうですね、と言いながら、俺もため息をつく。





「中止にしますか」

うーん、と会長は腕組みをした。しばらくして腕をほどき、会場を見に行くと、戻ってきて、そうだね、と言った。

「お客さん、二人しか来てないよ。五分前なのに」

ため息が出た。

わずか一時間で、何度ため息をついただろう。そう思いながら立ち上がった。

ヒーロースーツは着ているが、マスクはかぶっていない。

身体だけシャワーを浴びて着替えるか……。

「きゃあっ」

女性の叫び声だ。控室から廊下へ出て、声のしたあたりへ向かう。

おそらく会場の外だろう。

大きな門をくぐると、女性が倒れていた。

すぐそばにタイヤの跡が弧を描くようについていて、

倒れた女性とタイヤの跡は、重なっている部分もあった。

「轢かれたのか？」

思わず声に出す。



村田さん、と叫ぶ声がした。

尾崎だ。——だがどこに？

見回すと、必死の形相で走ってくる。

俺のすぐそばまで来ると、尾崎は肩で息をして、しっかり覚えましたよ、と言った。

「覚えたって、何を」

「ナンバーですよ、車の」

なるほど、そうか。

「救急車は呼んだのか」

「ええ、もうすぐ来ると思います」

「じゃあ俺が乗っていこう」

尾崎はうなずいて、警察に通報します、と携帯電話を取り出した。

そのとき、足元で泣き声がした。

見ると、小さな男の子が俺と尾崎の足にすがりつき、
しゃくり上げながら、何かを伝えようとしている。

俺と尾崎はしゃがみこみ、男の子の言葉に耳を傾けた。

「ネギ戦隊みたいにやっつけたかったんだ。」

「ホントだよ。ホントに僕……」





でも、何もできなかったんだ——。そう言って大声で泣き出した。

突然の出来事にどうしていいか分からず、俺は途方に暮れた。

だが尾崎はにっこり笑って、男の子の頭を力強く撫でた。

「わかるよ、やっつけたかったんだよな」

男の子は泣きながら、それでもうん、とうなずいた。

「もう一度、お母さんを助けるチャンスだ」

尾崎が言うと、男の子は顔を上げた。

「もうすぐ救急車が来る。救急車が来たら、このおじさんと乗って病院へ行く。

それがひとつ。もうひとつ、やることがある」

二人とも真剣な表情だ。

「病院へ行ったら、今日あったことを順番に話すんだ。

家を出たあと、どうやってここへ来て、そのあと何があったか。

どうしてお母さんが轢かれたのか、それをお医者さんに伝える」

「お医者さんに……？」

ああ、と尾崎は言った。



「このおじさんは、お母さんに何があったか見ていない。俺も見ていない。

お母さんのことをお医者さんに伝えられるのは、君だけだ。わかるね」

男の子はうなずいた。

「お母さんに何があったかわかれば、助かる可能性が大きくなる。

大切な仕事だ。 どうだ、できるか」

男の子は尾崎の言ったことを考えているようだったが、
しばらくして、力強く、うん、とうなずいた。

「僕できるよ。お母さん助ける」

尾崎はもう一度、わしゃわしゃと男の子の頭を撫でて立ち上がり、
自分を指して言った。

「おじさんは、お巡りさんに知らせる。

君のお母さんをひどい目に合わせた車のこと、全部伝えるから」

男の子はにっこり笑ってうなずき、小さな手を差し出した。

握手を求めているのかと思ったら、小指以外を曲げて、げんまん、と言った。

「よおし、げんまんだ。約束、な」

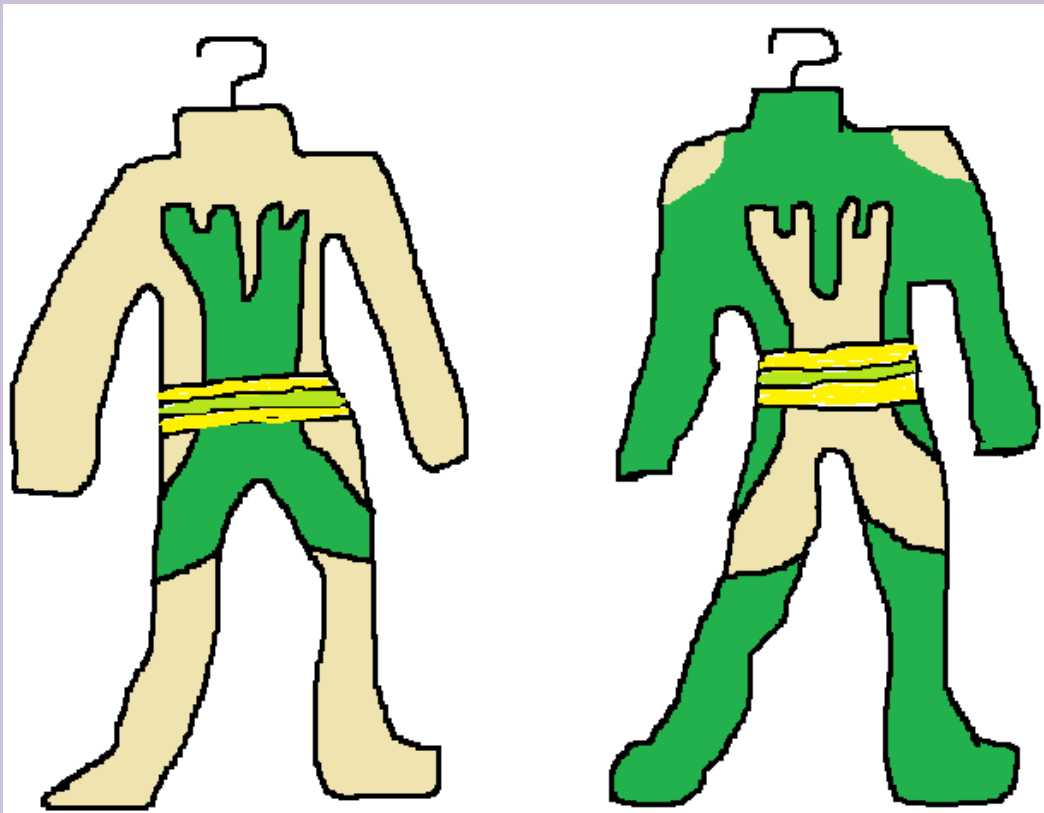
「うん！」





NEGI suits before the show

ネギ戦隊着用スーツ



Negi-white

ネギホワイト

Negi-green

ネギグリーン



「昨日はお疲れ様。その甲斐あって満員だよ」

「本当ですか！」

尾崎が叫んで立ち上がる。

「ホント、ホント。尾崎ちゃんのおかげだよ」

たしかにそのとおりだ。

他に目撃者はおらず、尾崎がナンバーを覚えていなければ、
ひき逃げ犯は逃げおおせただろう。

会長が広げた新聞には、

「お手柄ネギ戦隊 ひき逃げ犯逮捕に協力」と見出しが出ていた。

地方紙とは言え、一面に載る意味は大きい。そのおかげでイベントは 大盛況。

昨日まで閑古鳥が鳴いていたとは思えない変わりようだ。

変わりようといえば、尾崎だ。

昨日といい今日といい、まるで別人だ。

ちえ、何だよ調子狂うじゃねえか、俺だって——。



思わず愚痴がこぼれそうになる。

だが嬉しそうな尾崎の顔を見ているうち、まあいいか、と思えてきた。

せっかくやる気になったのだ。水をさすことはない。

「昨日はあんなことで中止になっちゃったけど、新聞にも取り上げられたし、

結果オーライって感じだよねえ」

俺も尾崎もうなずいた。会長の言うとおりで。

「でも尾崎ちゃん、なんで急にやる気になったの？」

もっともな疑問だ。尾崎は照れくさそうに頭をかいた。

「実は——」

おととい会った声優とアドレス交換をして、最初に来たメールに、ネギ戦隊カッコいいね、と書いてあった、らしい。

「それだけ？」

「それだけ、って——」

ふてくされたのか、尾崎は仏頂面になった。





「カッコいいね、って言われたのが、嬉しかったんじゃないですか」

助け船を出すと、尾崎がニタッと笑う。

「そうなんですよ！ さすが村田さん、よくわかってますねえ」

おい、とツッコミを入れたかったが、当たり障りなく、はは、と笑った。

「ホント、僕が師匠とあおぐ人の息子だけのことはありますね」

え……。

「今、なんて……？」

「へ？」

尾崎はぽかんとしている。無性に腹が立って叫んだ。

「今なんて言ったんだよ！ 僕が師匠とあおぐとか何とか——」

——ちょっとちょっと村田ちゃん。

会長の声が聞こえたが、なおも尾崎に詰め寄った。



「師匠とあおぐって誰のことだよ、ええ？」

両手で尾崎の胸倉をつかみ、激しくゆすった。

「言えよ、言えってんだよ」

「村田ちゃん！」

ハッとして尾崎を見ると、ひどく怯えた顔をしている。

「落ちついて、ね」

俺は尾崎から手を離し、すまん、と謝った。

「で、何だって？」

会長に問われても、尾崎はまだぼかんとした顔だ。

「僕が師匠とあおぐ人の息子とかって言ってたでしょ。あれ何？」

ああ、とようやく思い出したように、尾崎は俺に言った。





「動画サイトですごい人見つけたんですよ。
スーツアクターなんですけど
めちゃくちゃすごい人で、
村田さんのお父さんだって知って、
ホントびっくりでしたよ。
なんで言ってくれないんですか、
水くさいじゃないですか！」

「だってさ。よかったね、村田ちゃん」

.....目の前がぼやける。

俺は二人に背を向け、天井を見上げた。

二日前、やはり天井を見ながら、オヤジに相談したのを思い出す。

オヤジの仕業かよ.....。



目を閉じると、オヤジの颯爽とした姿がまぶたに浮かぶ。

子どものころ、ワクワクしながら見ていた、いちばんカッコいいオヤジの姿.....。

その姿も次第にぼやけ、目と鼻の奥がつんと痛んだ。

会場から、俺たちを呼ぶ声がある。身体じゅうに力がみなぎった。

大きく息を吐き、二人のほうへ向きなおる。

「一丁やってきますか」

尾崎は俺にウインクをして、ヒーローマスクをかぶった。

くそっ。カッコつけてんじゃねえよ。

「ちゃんとあとから来てくださいよ」

「わかってるよ！」

尾崎のやつ、一丁前のこと言いやがって。

「お前こそ、簡単にやられんじゃねえぞ。俺が行くまで持ちこたえとけよ！」

尾崎は振り返り、右手を上げた。





いちいちカッコつけんじゃねえ、と心の中で悪態をつき、

尾崎、いやネギホホワイトを見送った。

ネギホホワイトは世界を救うべく、小走りに敵のもとへ急ぐ。

その姿は、ヒーローそのものだった。

「なあオヤジ」

俺はつぶやいた。

「ヒーローって、カッコいいな」

そうだ。ヒーローはカッコいい。どんなヒーローも、例外なく「カッコいい」。

そのカッコよさは、誰にも分からないかもしれない。

でもいいじゃないか。ほかならぬ自分が認めているのだ。

「オヤジ……」

こらえていた涙が、ほとばしるように溢れだす。

同時に嗚咽がもれた。

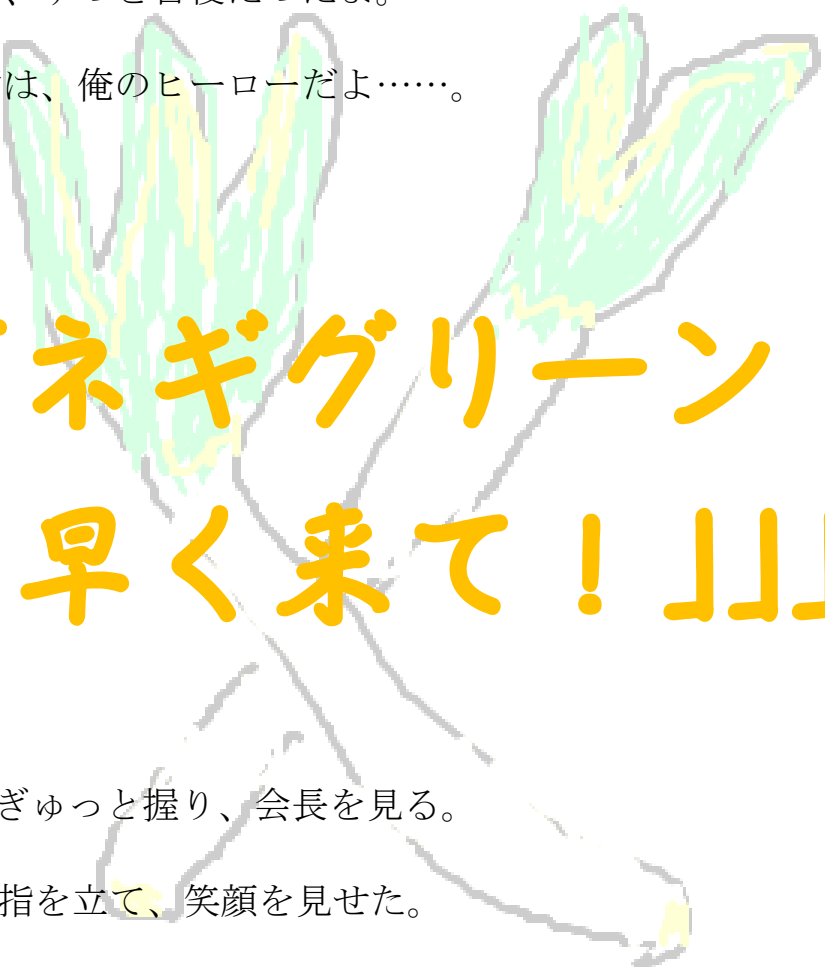


「オヤジ、俺——」

そこから先は、言葉にならなかった。代わりに心の中でオヤジに言った。

オヤジのこと、ずっと自慢だったよ。

今でもオヤジは、俺のヒーローだよ……。



「『ネギグリーン！
早く来て！』」

両のこぶしをぎゅっと握り、会長を見る。

会長は右の親指を立て、笑顔を見せた。

俺も笑顔で右の親指を立て、ヒーローマスクをかぶった。

☆おわり☆



2014 年 3 月 22 日（土曜日）

お手柄ネギ戦隊 ひき逃げ犯逮捕に協力

危険運転 以前から事故相次ぐ

昨日午後一時ごろ、△市
○町の公民館前の路上で女性
性が倒れているのを通りが
かった男性が発見、警察と
消防に通報した。付近には
タイヤ痕があり、ひき逃げ
が疑われた。

女性は救急車で市立総合
病院へ搬送され、全身打撲
のほか内臓に損傷が認めら
れたものの、命に別条はな
いとのこと。一ヶ月ほどで
退院できる模様だ。

この女性は市内に住む猫
川猫美さん（仮名）。息子の
猫太くん（仮名）と、公民
館で開催予定の「ネギ戦隊
タベルンジャーショー」へ
出かけて事故に遭った。

現場では以前にもひき逃
げ事故があり、警察が注意
を呼び掛けていた。
猫川さんを発見したの
は、当のネギ戦隊だった。

ネギグリーンこと緑谷さ
ん（仮名）によれば、開始直
前に悲鳴が聞こえ、外へ出た
ところ猫川さんが倒れてい
るのを発見した。そこへ相棒
ネギホワイトこと白坂さん
（仮名）が現れ、手分けして
消防と警察へ通報。緑谷さん
は猫川さんの息子、猫太くん
とともに救急車で病院へ向
かい、白坂さんは目撃情報を
警察で証言した。

白坂さんの証言をもとに
警察が捜査を行ない、△市の
友人を訪ねていた×市在住
の犬太くん（おおいぬたけし）
が容疑者として浮上。犬太本
人に質したところ容疑を認
めたため、その場で逮捕し
た。

過去の事故も犬太容疑者
の関与が疑われ、警察では慎
重に捜査を進めている。

本日から毎日、タベルン
ジャーショーは公民館で午
後三時から開催される。入
場は無料。NPOとのタイ
アップにより、ショーの終
了後には△市内産のネギと
料理レシピが配布される。
春休み、子供たちと一緒に、
地元ヒーローの活躍を
目にやきつけてはいかがだ
ろうか。

（比）

事故に関する
コメント



○町元自治会長 Nさん
休日になると都会から無軌
道なドライバーがやってき
て大変迷惑している。市と
しても対策が必要ではない
か。

△市警察交通課勤務

Sさん

ネギ戦隊、交通安全教室に
ゲストで来てほしいです。

【豆知識】#一〇六

「ネギ戦隊

タベルンジャー」とは

ネギホワイト、ネギグリー
ンの二人からなる戦隊。当
初五人で編成されたが、う
ち四人が相次いで脱退し活
動休止。昨年一人が加入し、
二人体制で再始動した。
名前の通りネギの消費拡大
を目的とする戦隊で、ネギ
を丸ごと食べる重要性を訴
えるため、ホワイト（白）
とグリーン（緑）の二人で
風邪大魔王を倒すという内
容のショーを行なってい
る。

NEGI suits after the show, to be sent
straight to the laundry service!

ネギ戦隊着用後スーツ

即、ランドリーサービスへ！



Negi-white

ネギホワイト

Negi-green

ネギグリーン

Special thanks to: MOUNT ZINE School

Gratitude to you as well who are reading this *zine* right now!

Hope to see you again, in the near future☺

----Miki Hiraoka



完成にこぎつけられたのは

MOUNT ZINE スクールのおかげです。

ありがとうございました。

この *zine* を読んでくださっている方へも、

お礼を申し上げます。またすぐにお会いできますように。

比良岡美紀